

『絶望死のアメリカ：資本主義がめざすべきもの』

信金中金月報掲載論文編集委員長

地主 敏樹

(関西大学 総合情報学部教授)

昨年翻訳された本のタイトルです(みすず書房、2021年)。アメリカにおける40～50代の白人の死亡率上昇というショッキングな事実に焦点を当てて、その主な死因が著者たちの言う「絶望死」、麻薬性鎮痛剤(オピオイド)過剰摂取とアルコール性肝臓障害および銃による自殺であることを示した本です。消費者行動の研究でノーベル経済学賞を獲得したディートン教授の傑作です(同僚のケース教授と共著)。

日本経済新聞は年末になると、「エコノミストが選ぶ経済図書ベスト10」という記事を掲載しますが、私は昨年この本を第1位に推しました。30人ほどの投票の結果として第1位に選ばれたのは、同じノーベル賞受賞者であるシラー教授の『ナラティブ経済学』(東洋経済新報社、2021年)でした。資産価格バブルなど金融面の研究で知られる彼らしい内容で、社会経済の中長期的な動きに影響を及ぼすストーリー(ナラティブ)があることをアメリカの経験などに基づいて示そうとしていました。今の日本経済に即して言うならば、「日本の人口は減少していくので、日本経済が力強く成長することはないだろう」というナラティブが、支配的なものかもしれません。

残念ながら、他の方々からの支持が集まらずに、『絶望死のアメリカ』はベスト10に入りませんでした。しかし、現在のアメリカ社会・経済を理解するには、この本がとても重要だと考えられます。私は、前任校の神戸大学で30年近くアメリカ経済論を講義していました。研究仲間の協力を得て、アメリカ経済論のテキストも2冊編集しました。学生たちにアメリカ社会・経済を観察する眼を修得してほしいと願って、できるだけ多面的に日本経済・社会との異同を見せることに腐心したつもりです。学生の刺激になればと思って、ずっと英語で講義していました。発音が悪いので、「上手でもないのに、どうして英語で話しているの?」と、不思議がる学生もいたようです。

アメリカ経済を継続的に観察して講義内容をアップデートすることが必要でした。アメリカ経済に関する原稿や講演を依頼されることも度々でした。そのような私にとっても、トランプ前大統領の登場は衝撃でした。どうして、彼のような経歴の人間が共和党の予備選を勝ち抜いて、さらに本番の大統領選にも勝つことができたのでしょうか。1980年代後半にハーバード

大学で学んだ私にとって、トランプタワーは不動産バブルの仇花でしかなく、トランプは多くの借金を踏み倒した失敗ビジネスマンでしかありませんでした（日本の銀行も彼に融資したと思います）。その後にプロレスや視聴者参加TV番組の司会者としての成功があったにせよ、ポピュリストに過ぎないと考えていました。

トランプはなぜ勝てたのでしょうか？田舎に住む白人貧困層が、彼の岩盤支持層です。彼が再選に失敗した後もその支持はほとんど揺らぐず、選挙の不正という彼の主張に賛同していると、報道されています。私がアメリカに住んでいた頃も、アメリカの製造業は日本との競争に敗れたこともあって衰退していました。人種的偏見を反映するような振る舞いも、白人労働者階級などに見られるものでした。労働者階級の子供たちの教育がうまく行っていないことは諸指標に明らかでしたし、親たちも外国に対する知識や理解に欠けることが多いように私には思われました。それでも、当時は保守革命を掲げたレーガン（元映画俳優）が大統領になるのがせいぜいでした。

レーガン以降に何が変わったのでしょうか？トランプ当選前、私に見えていた重要な変化は、2点ありました。第1は、クリントン政権で進んだ民主党の変化です。クリントン政権は、国内製造業の衰退を受け入れて、北米自由貿易協定を締結し、中国のWTO加盟を進めました。さらに金融自由化を強力に推進したことで、労働者階級の利益を重視しないことが明瞭になりました。第2は、アメリカ経済の産業構造の変化です。伝統的製造業を切り捨てた代わりに、IT産業と金融産業が興隆してアメリカ経済は「復活」したのです。ただ、その行き過ぎは、2000年代に入ってITバブル崩壊と住宅バブル崩壊へとつながり、格差拡大ももたらすこととなりました。トランプに敗れたヒラリー・クリントンを、労働者階級が支持しなかったのは当然のことと言えるでしょう。

私に見えていなかったのは、労働者階級の傷み方の程度でした。その酷さを明らかにしてくれるデータが「絶望死」の指標で、トランプ支持の強さに初めて納得できたように思いました。近年の先進各国の中で、アメリカの白人中年層だけ死亡率が上昇しているのです。大学に進学できなかった白人労働者階級の人々が、まともな仕事に就けず、社会的なリスクも失って、絶望して死を選んでいるのです。絶望死の周辺にいる「見捨てられた」人々が、トランプに賭けている現状なのです。この状況に対して、ハーバード白熱講義のサンデル教授は『実力も運のうち』（早川書房、2021年）という本を出して、社会的な価値観の変革を訴えています。

これからの日本はこうした悲惨な状況を免れることができるのでしょうか。阪神大震災後の仮設住宅では「孤独死」が注目されました。高齢男性のアルコール依存というケースが多かったと思います。高齢化と少子化が進み、家族やコミュニティのあり方が急速にかつ大幅に変化してきた日本です。『絶望死の日本』という本が書かれないようにしたいものだと思います。